

今日の哲学の使命とはなにか。

「世界哲学」はその使命のひとつである。これは、「大文明の哲学」「人間中心の哲学」「理性中心の哲学」「男の哲学」などを解体しようとする。

もしこの世界哲学を徹底するなら、「西洋対非西洋」という図式も解体しなくてはならない。つまり、たとえば「西洋哲学」に対して「東洋哲学」を対抗させて、後者によって前者を批判する、というような営みも間違っているのである。なぜなら、たとえば「中国哲学」によって西洋哲学を批判しようという場合に、その中国哲学も「大文明の哲学」「人間中心の哲学」「理性中心の哲学」「男の哲学」であるなら、これは単に「旧哲学」陣営のなかでのヘゲモニー闘争にすぎないはずだからである。そして実際に、たとえば朱子学などは、「大文明の哲学」「人間中心の哲学」「理性中心の哲学」「男の哲学」そのものである。

ここでわたしは、服部英二が「transversal」という語を「通底」と訳したことを踏まえて（ただしその解釈を少し変えて）、「通底哲学＝transversal philosophy」という語を提唱したい。世界哲学には、通底哲学と非通底哲学がある。前者は、これまでいわゆる「西洋哲学」とか「中国哲学」「インド哲学」「イスラーム哲学」などと呼称されてきたもので、その内部にさまざまなヴァリエーションがあるとしても、一定の大文明圏の範囲内で通底する世界観を表現してきたものだ。これらは普遍的と思念されてきたが、実はそれぞれの大文明圏に特徴的な人間観、生命観、共同体観、秩序観、超越観などが強く反映されたそれぞれ特殊な世界観であるにすぎなかった。

それらの通底哲学によって排除・抑圧・蔑視されてきた別の世界観が、大文明圏の内部にも外部にも、多数多様にある。世界哲学はそれらを丁寧に拾い上げ、記述し、考察しなくてはならない。

世界哲学の観点から見ると、たとえばこれまでの「人間」という概念自体が、大文明的かつ通底哲学的世界観を標準に考えられすぎている、ということがわかる。

「人間」とはそもそも、西洋や中国といった大文明が生み出し、継続して絶え間なく通底的に議論されてきた「あるもの」を指している。本来は西洋や中国といった地域の限定性が介在しているので特殊な概念であるはずなのだが、それが大文明という支配的イデオロギーとセットになっているので「普遍的」な概念として錯視され、君臨してきた。

大文明によって議論され規定された通底哲学的な「人間」「人」概念を無条件に前提としてしまうことが、どのような問題を引き起こすのか。たとえばそれらがほぼ全面的に男性によって構築されてきたものであり、女性が排除されているという点があ

る。たとえば人類の大文明においては、性や親族の規範に関してもきわめて男性中心主義的な世界観が強く関与している。このことが人間観の形成において大きな影響を与えていることを、わたしたちは正確に認識する必要がある。性や親族の規範が男性中心主義的でない文化においては、人間そのものに関する考え方も当然異なるはずだという認識を持たねばならない。

また、大文明における男性中心主義的な道德観が通底的な人間概念に与える影響も大きい。たとえば儒教の「性」や「理」などという概念も、男性中心主義的な中国の性や親族の規範のもとに成り立つものなのであって、これを文明的・文化的な文脈から切り離して「真」「普遍的」と認定してしまうことは、間違いなのである。

以上のことを前提にして、本発表では「群島文明としての日本」における非通底的な人間観や生命観について考察してみることにする。

東アジアの儒教や仏教の内部にも、通底哲学とそうでないものがある。儒教でいうなら朱子学がより通底的で陽明学はより非通底的である。仏教でいうなら華嚴がより通底的で天台はより非通底的である。陽明学より朱子学のほうが大陸文明的な理性＝道德中心主義に合致しており、天台より華嚴のほうが大陸文明的な道德観・秩序観・権力構造に合致しているのである。中国的な世界観を受容する際に、朝鮮が明確に朱子学と華嚴を重視したのに対して、日本は陽明学と天台も重視したという事実、通底性をめぐる東アジア各地域の差異が表れている。「行よりも知の優越」「善・悪の境界の明確化」「統合的秩序の重視」という大陸的な傾向を、陽明学よりも朱子学が、天台よりも華嚴がより強く持っているのである。

さらに日本では、天台の世界観の上に性悪説、菩提心の否定、悪人正機、日常臨終などの哲学が開花した。また陽明学の世界観を極端化して反生命中心主義にまで行き着いた。これらには、日本の社会構造から生まれたさまざまな非通底的な世界観、たとえば女性の世界観の重視、大地性の欠如、生命の軽視、非実体的な言語観などが強く作用しているのである。

たとえば生命軽視の世界観を否定する世界観においては、尊厳という概念を考究するときも、生命尊重という通底的な「真理」という限界の枠内で思考するしかない。そのような限界を超えるために、非通底哲学は重要なのである。